

(7) 利岡小学校

学 校 長 武田 博文
校内研究代表者 市原 百梨佳

1. 研究主題 「複式授業で学びを深める児童の育成」 ～「読む力」を育てる国語科授業づくり～

2. 主題設定の理由

本校は平成30年度まで複式学級を有する学校として複式授業の授業改善や指導法の工夫等の研究を行ってきた。そして、この年から思考力・判断力・表現力を育てるために言語活動に重点を置いた国語科の授業づくりの研究に転換している。平成31年度には完全複式校となり、複式授業のスタンダードを確立するため、学習リーダーを中心とした主体的に学ぶ態度の育成と「とも学び」の充実を目指した。令和2年度からは研究主題を「複式授業で学びを深める児童の育成」とし、以後、複式授業のスタンダードの確立と国語科の授業づくりを研究の柱として授業改善を図ってきた。

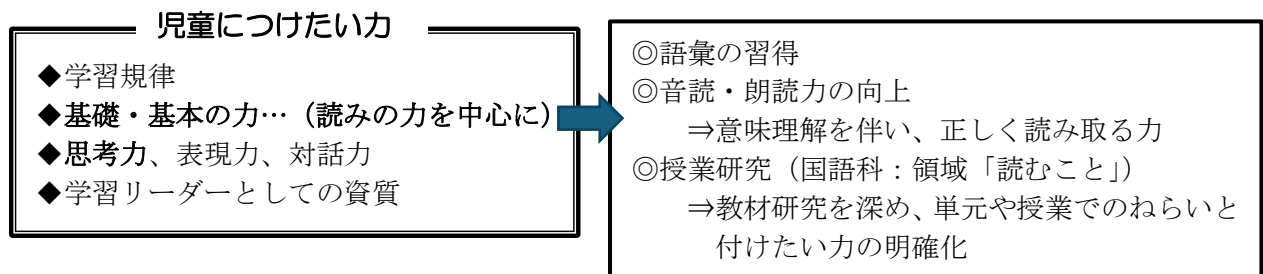
昨年度は、副題を「思いや考えを伝える力を育てる国語科の授業づくり」として伝えたいことをどう表現すれば相手に分かりやすく伝えることができるのか、全学年の共通課題として国語科の授業において「話すこと」に重点を置き、スキルアップを目指した研究実践を行った。その結果、児童は常に聞き手を意識して自分の言葉で思いや考えを堂々と発表することができるようになり、学習発表会や四万十の子ども研究発表会等の場でもその成果を披露することができた。

また、各種学力調査では、ここ数年全国平均よりも高い結果を維持し、昨年度の全国学力・学習状況調査では国語が全国より+13.2ポイント、算数が+12.5ポイント上回るなど一定の学力が定着していると考えていた。

しかし、今年1月に全学年で実施した教研式 CRT では、国語科に課題が見られる結果となった。日々の授業で感じるのは、児童の文章を正確に読む力の低下である。「読むのが遅い」「読み間違いが多い」「すらすら読んでいるが内容を理解しながら読むことができていない」という課題が顕著となっている。学年が上がるにつれて、文章の量・質ともレベルアップするため各教科の不振にもつながっていると思われる。文章を速く正確に読む力は、すべての学習の基礎となる力である。

そこで、今年度は、今一度基礎基本に立ち返り、文章の正しい読みに加えて流暢性を高め、その先の読解力向上へとつなげる指導を行っていきたいと考える。研究主題は引き続き『複式授業で学びを深める児童の育成』として研究の核となる複式授業づくりの取組は継続するが、副題を『「読む力」を育てる国語科授業づくり』として、国語科における語彙の習得と意味理解を伴った音読力・朗読力の向上、そして「読むこと」に重点を置いた授業研究を進めていくこととした。

3. 研究の進め方と方法



(1) 読みの流暢性を高める取組

① 児童の「読み」の実態を把握する

- ・MIM—PM アセスメント ・初見読みテスト
- ・認知ソーシャルスキルトレーニング「コグトレ」を使用して聴覚性短期記憶と文章理解のテスト

② 多層指導モデル MIM の活用

- ・高知大学教育学部 松本 秀彦先生を招聘（全3回）しての研修
- ・毎週金曜日の朝、5分間の MIM タイムを設定

③ その他全校や学級での取組

全校	2・3・4年	5・6年
○音読指導の強化 ・文章表記通り正確に読むことを徹底 ・授業の中で必ず音読の場面を確保 ・音読発表会	・家庭学習での音読を動画撮影 ・朗読の際の動作化 ・読み聞かせ ・音読の題材選び	・意味調べの時間を確保 ⇒わからない語句は写真やイラストで視覚支援 ・帰りの会での新聞記事紹介 ・教科書「言葉の広場」の活用した語彙の習得

(2) 国語科授業づくり—研究授業の充実を図る—

① 教材研究・・・2回の事前研

事前研 1

- ① 児童の実態と学習指導要領のねらいをもとに、単元目標及び児童に身に付けさせたい力を設定
- ② 教材文を読み込みながら（教材分析）、言語活動を設定し学習計画を作成

事前研 2



- ③ 再度の教材文研究
- ④ 複式授業において軽重やずらし等、児童の実態や思考を考えながら学習展開を検討し、具体的に指導案を作り上げていく

② 研究授業

授業の観点

- ・複式授業における授業構成と支援
- ・授業改善プランに関わって
- ・言語活動を通して見方・考え方を働かせていたか

③ 事後研

- ・ロイロノートを活用して意見を共有

4. 成果と課題

〈成果〉

- ・学力テストの評価とその要因を讀みのつまずきにあると捉え、児童の讀みの特性、困難さの背景を学校全体で掴み、指導方法を検討することができた。
- ・朝学習を活用して、学年ではなく個に応じたグループ別に分けて取り組むことができています。
- ・児童一人一人の実態について教員間で情報共有ができていたため、児童の反応を予想しながら十分な教材分析ができた。
- ・協働して指導案を作成することを通して、授業の視点がより焦点化された。
- ・以前に比べ、指導案がよりブラッシュアップされると同時に、負担感も軽減された。
- ・事前研で協議した内容が本時の指導でどうであったか、事後研での話し合いが充実したものになった。

〈課題〉

- ・讀みの困難さが大きい場合、一つ一つの困難さに対する支援方法はあっても教員数や時間が必要であり、通常学級では支援が限定的になる。